



人間関係を豊かにする ほめ術

文 | toshi
イラスト | 秋野 純子



○ほめて伸ばそう

子どもの良いところを見つけてほめる、なかでも一番気になっている点をほめることができれば、すばらしいでしょう。

たとえば、うるさくて先生や友達の話聞いていないとしたら、静かに先生や友達の方を向いて話を聞いている子を見つけて、ほめることです。

その際、意外性のある子をほめることができたらいいですね。逆にいつも同じ子ばかりほめているとしたら、効果的ではありません。

また、静かでもないのに、「静かにしていてえらい」などというのも良くありません。先生は静かにさせようとして言うのでしようが、子どもは逆に、「ああ、この程度でほめてくれるのだ」と思ってしまうものです。

言葉を吟味することも大切です。たとえば、「静かにしている」と「人の話を聞いている」のとは違いますよね。静かにしているだけなのに、「人の話をよく聞いている」などとほめるのは良くありません。「あつ、今、うなずいていたね」とか、「にこっとしたね」などと言いなから、「よく聞いている」ことをほめることです。

さらに、しぐさ、言動など、気付いたまま言葉に出すと、さらに効果的です。

教壇に立ち、早4カ月たちましたね。学級担任にも慣れ、子ども一人ひとりの気心もわかるようになってきたのではないのでしょうか。

また、子どもも新しい先生に慣れて、本来の性質を発揮し始めていると思います。

そうになると、初めの緊張状態はなくなり、子どもが生き生きする反面、トラブルも増え、「学級のルールを守らない」「先生や友達の話聞かない」など、困ったことも増えているのではないかと思います。

夏休みを間近にひかえ、一学期のしめくくりとなるこの時期、新米先生にとつては最初の正念場ではないでしょうか。

それでは、この時期の学級経営、児童理解のあり方について考えてみたいと思います。

子どもと動き回れる。子どもと感覚がぴったり合う。

それは子どもたちにとって最大の魅力。

「さあ！その若さという武器を最大限発揮しよう」

toshi先生から新米先生へのエールです。

< toshi先生プロフィール >

子どもたちと存分に遊んだ新任時代。日々子どもたちの思考の筋道を大切に、授業で子どもをどう生かすかを考える一方で、学級経営や児童理解のあり方に頭を悩ませた修行時代。子ども第一の学校経営を考えてきた校長時代。35年の教員生活を経て、現在は小学校の初任者指導にあたっている。「ある退職校長の想い」「小学校初任者のホームページ」でブログを執筆中。

これはマンネリを打破する効果もあります。

○マンネリはだめ

たとえば、静かにさせるために、先生が黙って静かになるのを待つとしましょう。そうすると、「ほら。静かにしろよ。先生が見ているよ」などと言う子が現れます。それによって先生は話し始めるのですが、いつもこのパターンだと、そのペースに子どもは慣れてしまい、次第に注意する子もいなくなり、いつまでも黙って待つことになりかねません。事態が悪化するわけです。

このように認識したら、対応を変えなければいけません。たまにお説教するのもいいでしょう。叱れば態度が良くなるでしょうから、そうしたら間髪入れずほめることです。とにかく手を尽くすことです。そう、お説教も叱責も、ワンパターンでは、やはり良くありません。

○一人ひとりをほめる

ほめるにもコツがあります。ほめる基準をそろえようとすると、ほめられるばかりの子と、ほめられることのない子ができてしまいます。そうではなく、どの子もほめるようにしましょう。

そうになると、一人ひとりの努力すべき点を先生が把握しなければなりません。宿題をやってきたとか乱暴しなくなったとか、たとえばそれだけでもほめる子をつくらないと、どの子もほめられるようにはなりません。そうすると、「えこひいき」と子どもから言われるのでは、と心配になるかもしれませんね。でも、「どの子もほめる」という姿勢でいる限り、ほめられる量はさう方向になるので、大丈夫です。

もうひとつ。心からほめることが大切です。言葉ではほめていても、叱責するような表情だったり、無感動そのものだったりすることがありますが、これでは効果は期待できません。ほめるにしても感動するにしても、態度で示すことが大切です。

○朝の会で、三つ、ほめましょう

話を具体的にしましょう。学級全員でも数人でもかまいません。思いやり、協力、一生懸命、ゆずり合いなど、先生が気付いたことを気付いたままほめることが大切です。そうすれば子どもたちは「今日、先生は何をほめてくれるかな？」という期待感から、真剣に話を聞くようになるでしょう。

私の経験では、一週間で子どもはがらりと変わります。そして、子ども同士の

関係も良くなるのです。トラブルなどはぐっと減りますよ。あつ、そうそう。トラブルになっても、自分の非を素直に認められたとか、反省する心が豊かだったとか、そのようにほめるべき点を見つけられるといいですね。このようにして、学級内の互いの人間関係が豊かになるように取り組んでみてください。

今回は、授業のこと、学習のことにはふれませんが、まずは、学級がひとつにまとまることをねらいます。そうになると、学習効果も自然と上向きになるもの。次回は、そこに焦点をあてましょう。ご期待ください。

